

若手教員と語る ー教育現場の現在と課題ー

山田 優輔（相模女子大学高等部）
古賀 礼佳（船橋市立習志野台中学校）
山田 敬久（和光市立第三中学校）
伊藤 貴昭（明治大学文学部）
伊藤 直樹（明治大学文学部）

はじめに

第7分科会は、明治大学教職課程常設分科会として設定された分科会であり、今年で3回目の開催となる。

本分科会は、教員歴2～3年の若手教員にお越しいただき、これまでの教員経験に基づき自由に意見交換を図ることが目的となっている。また、若手教員の生々しい話が聞けるといことで、毎年多くの学生の参加が見られる分科会となっているのも特徴である。

今年度は、3名の若手教員の先生方にお越しいただき、各先生方の現実の姿を具体的かつ興味深く紹介していただいた。学生からも多数の質問があり、また現職の先生からの貴重な意見があったりと、盛況のうちに終了した。以下、3名の先生方から分科会の感想や、分科会で伝えられなかった点などについて寄せていただいたものを掲載する。

（伊藤 貴昭）

私立学校における常勤教諭という雇用形態とその苦難について

山田 優輔（相模女子大学高等部）

1 はじめに

先日の明治大学教育会の分科会への参加を打診された時、実は「僕なんかが一体何を話せるだろう」と最初は感じた。後述のように私の教員人生は決して順風満帆なものではなく（社会科教諭を目指す時点で覚悟はしていたのだが）、失敗の連続で今日まで至っている。私よりもはるかに優秀で、優れた指導を行っている同世代がたくさんいる中で私のような者が、優秀な明治の大学生を相手に何を語っていけるだろうか。そんな風を感じたからである。その場の勢いで思わず講演会にでることを了承したものの、やはりこの思いが私にまわりついてきた。後日、当日の参加者をメールで教えていただいた時も、他の方は公立の教員である点に目が引かれてしまった。「やはり畏れ多いことだったのだろうか。」という思いが一層強くなったのを今でも覚えている。自分だけではこの思いを処理できないと感じた私は、懇意にさせていただいている副校長先生にこの思いを吐露した。その時に副校長先生は思わぬ返答をしてきたのだ。「思いのまま話せばいいんじゃないか。君らしさを出して来ればいいんだよ。」と。その言葉を受け、私は私自身が教員生活の中で経験し

てきた失敗や思いを喋ってこようと決断するに至ったのである。

今思うとたった15分という短い時間で、自分が経験してきた2年半の話をするのは困難であった。自分の中でも話している内容が支離滅裂となってしまう、伝えなかったことを十分に伝えられなかったと悔いが残っている。そこでこの紀要にて、自身の教員生活で感じたことをまとめたいと思う。自分の話を語っていくので冗長と感じてしまうかもしれないが、私の経験を下の世代に生かせればという思いで筆を執るのであらかじめご了承ください。

2 常勤教諭の苦悩

4年前の大学4年生時代。東京都と宮城県の2つの自治体の教員採用試験を受験し、前者は一次試験で後者は二次試験（わざわざ新幹線で仙台にまで行ったのに）で、公立学校で教鞭を振るうという夢は、はかなくも散ってしまった。周りの友達が続々と内定を獲得し、「卒業旅行に行ってきた。」や「内定式で友達が出来た。」といった話を人づてやSNSで耳にしたり目にするようになる中で、中々就職口が決まらない当時の私（プライドも無駄に高かった）としては高校受験で第一志望に落ちた時以来の大いなるショックに打ちひしがれたのを今でも覚えている。苦肉の策でその年の秋に実施されていた教職大学院への進学を志すも、郵送されたのは非情な不合格通知であった。絶望のどん底に叩き落されていた私は、「ニート」や「フリーター」というその時まで全く想像していなかった未来がまさか自分の現実になろうとしている恐怖に押しつぶされそうになっていた。さすがにこの頃になると、社会人になったら必要になると思い通っていた自動車学校での空き時間に、まだまだ採用を続けている私立学校へ提出する履歴書を書くのが日課となっていた。しかし当然そう簡単に内定がとれるはずもなく、とっくに年をまたぎ、厳しい冬が終わろうとしていることを梅の開花が教えてくれる頃になっても、まだ採用が決まらなかった。結局、来年度の職が決まらないまま卒業式に出た。オーケストラサークルに所属していたため晴れやかな卒業式で仲間たちと最後の演奏が出来たことは、最高の思い出として今も覚えている。しかし同時に、就職が決まっていないという重圧により、心穏やかとは到底言えない私がいたことも明確に覚えている。式典後、ゼミやサークルでの仲間たちと飲み明かした。4月から始まる新生活の話で盛り上がる同輩を横目に、私はいつもよりも深酒をしてしまい家についたあとには泥のように部屋のベットへと倒れこんだ。明くる日、十分に機能していない体に振動が伝わる。ポケットに入れていたスマートフォンから伝わる振動であった。言うことをきかない手足を無理やり動かして、取った電話は先日最終選考を終えた私立学校からであった。「最終選考後、合格の場合は連絡いたします。」と言われて2週間近くが経過していたため、まったくあてにしていなかった私学から伝えられたのは、「あなたを採用します。」の言葉であった。その時は本当に嬉しく、二日酔いも全く気にならなくなっていた。この言葉が、地獄への序章に過ぎなかったとも知らずに。

「4月1日付での採用となります。契約書なども当日書いてもらいますので必要な書類を当日持参してください。」の言葉通りに、書類を用意し4月1日私は初出勤をした。最初

に勤めた学校は都内にある学校で、実家から1時間半から2時間ほどかかる場所にあった。

「御茶ノ水の方が遠かったけど、ちゃんと通えたから大丈夫であろう。」という甘い目測で実家から通うことにした。学校に到着後、いきなり校長室に呼び出された。面接の時に会ったニコニコした校長先生が、私の手を取り「よく来てくれたね。君みたいなチャレンジャーは大歓迎だよ。」という言葉をもたらした。就職が決まらず絶望していた私はこの当時ひどくこの言葉に感動して、「私のような人を拾ってくれたこの学校のために尽力しよう」と強く思った。今思うとこの時点である種、洗脳されていたのかもしれない。次に校長室の隣にある多目的室で副校長先生の指示を受けながら契約書を記入した。契約書には「基本給、見込み手当」、「年間の総支給額」の3つが書いてあった。当然、当時の私には、この契約書にためらいもなくサインを書いた。その日のうちに、自分が担当する科目や校務分掌、所属学年も伝えられた。担当科目は「中学社会科」、「日本史A」、「現代社会」、校務分掌は私学にとっては要となる入試広報部、所属学年は4年生(中高一貫の4年目。つまり高校1年生に相当)でその上担任もやってくれとのことだった。私は喜んでそれらの仕事を引き受けた。当時はこれがとんでもなく負担が大きいことを露とも知らなかったからである。

いざ教員生活が始まった。優しかった最初の学年主任の先生は、自分の仕事の傍ら私の仕事へのアドバイスをしてくれた。「春休みの間に各教科3時間分の準備をしておいた方が良い。」、「入学式の前にホームルームの準備をしておいた方が良い」と教わり、さっそく作業に取り掛かる。しかし、当時新任の教師であった私にとって授業準備は一から作らなくてはならないものでありかつ、それぞれの教科の勉強をしなくてはならない。しかも、それを3時間分も作らなくてはならないとあって、相当の時間が必要であったことを認識するのにさほど時間はかからなかった。その上、担任として学級開きのための時間割、掃除当番表、委員会・係活動の選定をしなくてはならない。教員という職種が大変ということに大学の時に聴いてはいたがここまでとは、と感じた瞬間であった。

その後、年度が本格的に始まると忙しさはさらに増していった。保護者会の準備、思わぬ形で突如舞い込む日々の生徒指導、そして入試広報部の作業。授業の準備はまさに自転車操業状態になり、終わらなかった仕事は休日に処理することが当たり前となった。睡眠時間は通勤時間の長さがネックとなり、自宅に帰るのが夜の0時を越えるのが当たり前となった。また朝は早く学校にいかなければいけないという教科主任の圧力もあり3時間睡眠が日常化していった。眠気を取るために、空きコマの時間にこっそり個室トイレで仮眠を取る毎日。その頃になると頭が回らなくなり、授業でも簡単な漢字を書き間違えたり、生徒への連絡を忘れてしまうといったミスが相次ぐようになった。当然、生徒との間に信頼関係を結ぶことも困難となっていき、保護者から頻繁にクレームをもらうようになってしまった。上司からの圧力、生徒・保護者からの非難、新任の教員にはとても処理できないほど膨大な仕事量。さらに勤めてからしばらくたって気付いたのが、6月と12月に大抵の勤め人は賞与というものがもらえるということであった。「ボーナスが出たから色々買い物をしちゃった。」などという話を友達がする中で、自分の口座にはそんなものが振り込まれていないことに気づいた。改めて契約書を確認すると、賞与は出ない旨が小さな文字で

書いてあったことに気づく。管理職や教科主任が「生徒のために頑張れ」という言葉がこの頃になってくると重圧へと変わっていた。まさに学校のために個を犠牲にすることを暗に強要される。私はこれを「私学地獄」であると感じた。

当時はそれでも自身の実力のなさが原因であると刷り込まれていた。お金も時間も私生活も投げ打って、仕事をこなしていき、ようやく安定した2年目の秋ごろ。文化祭の準備で忙しい中、校長室に呼び出された。そこで告げられたのは、「来年度は契約をしない。」という文言であった。「ここよりも君にふさわしい所がきっとあるさ。」「声だけは良かったよ。」とまるで他人事のように校長先生が語ったことを今でも鮮明に覚えている。どんなに必死でやったとしても評価されなければ、契約を打ち切られる。評価されていたとしても経営状態や雇用事情によって簡単に切り捨てられてしまう常勤講師という立場の厳しさを痛感した。

3 常勤講師の問題点

以上のような経験を踏まえて、自分の身に起きた悲劇は何が原因であったかをまとめていきたいと思う。

- (1) 若者の雇用に関する知識の乏しさ。
- (2) 買い手市場といえる私学教員採用の現状。またそれを見越して、足元を見た契約を行う私学。
- (3) 不安定な雇用形態を理由に、雇用側からの要求を断りづらい被雇用者。

私は以上の3点が、常勤講師につきまとう問題であると考えます。1点目の、雇用に関する知識の乏しさは新卒の社会人なら誰でも感じるどころであると思う。基本給が低いことのデメリット、有給休暇について、退職時に必要な書類についてなど大学では教わる機会が無い知識が社会に出てからはとても重要となる。自身の権利や命を守るために、このような知識は大学のうちには身につけておきたいものである。2点目の私学教員採用の現状については、平成26年度より始まった公立高校の無償化以来の公立高校への人気の高まりが大きな影響をもたらしているといえる。入試広報部を経験して感じたことであるが、有名大学の附属中学または高校に関しては大学までの所謂「エスカレーター式」の進学が可能であるため、今日においても根強い人気がある。しかし、それ以外の私学は公立高校の滑り止めとしかみなされていないため、毎年入学者数を確保するために必死な勧誘活動が展開される。そのような私学の経営状況は自ずと厳しいものとなるため、年収を低く抑えられる20代の契約教諭の雇用が各私立学校にて盛んに行われているのである。特に社会科や芸術科など一部の科目に関しては、各自治体が公表している教員志望倍率は非常に高く、雇用側からすれば多少厳しい雇用形態でも応募があるということで出来る限り安い賃金で雇用したいという思惑が働くのも無理は無いだろう。そして一番の問題が3点目である。契約社員である常勤講師は、原則年度更新であるため、来年同じ場所で働けるかが不透明なまま職務を遂行しなければならない。そのような背景から、管理職らの要求に対して拒否をしたりすることは難しく、無理難題を押し付けられても泣く泣くそれに応

じざるを得なくなったりするのである。このように都合のいい存在である常勤講師は、酷使するだけ酷使して都合が悪くなったりしたら契約を打ち切られてしまうといったぞんざいな扱いが容易にされうる立場であるといえる。

4 おわりに

ちょうどこの紀要を書いている最中に、インターネットのヤフーニュースで面白い記事を見つけた。「私立高校で204人の有期雇用教員が雇止め」と題されたその記事では、2018年が労働契約法の18条（無期転換権）の改正から5年目となり、雇用待遇の無期転換権を持つ被雇用者が出るタイミングであったことから、全国私立学校教職員組合連合が各私立学校へ「有期雇用者教員に対する対応」についてのアンケートを実施し、その調査結果がまとめられていた。その記事で、特に注目したのが常勤講師の15.7%、非常勤講師の9.7%が雇い止めにあっているとの報告であった。雇い止めにあっている常勤講師は20代から30代の教師が多く、無期転換権を得るための条件である「有期として5年以上の勤務」をする前に雇い止めされているのが大半であった。その記事に対するコメントの中に「高い給料をもらっている契約社員なのだから仕方が無い。」「民間企業でもよくある話。」と一般の企業をベースにした意見が多く寄せられていた。しかし、実際の常勤講師の賃金は専任教諭と比べると基本給も賞与の額も低く抑えられていることや、民間企業と違い専任としての就職枠が極端に狭いといった実情が中々認知されていないことが浮き彫りになっていた。だが常勤講師が抱えるこのような問題にもスポットライトが当たるようになったことは喜ばしい限りである。

ここまでで紹介した事例はあくまで一部の私立学校の例であり、全ての私立学校で同様の事例があるというわけではないことを肝に銘じていただきたい。実際に現在勤めている私にとって2校目の私立学校では、しっかりと被雇用者の権利が認められている上に、過酷な労働を強いられているわけではない。今回このような話をした理由は、安直な考えで簡単に就職を決めた結果、私と同じような経験をするはめになってほしくないただそれだけである。私立学校に勤めることを考えている者は、その点をしっかりと理解した上で採用試験に応募するとよいだろう。

最後にこのような話をさせていただく機会をくださった伊藤貴昭先生、山下達也先生並びに講演会を支えてくださった資格課程事務室の方々に心から感謝の意を表したい。

明治大学教育会分科会 報告書

古賀 礼佳（船橋市立習志野台中学校）

教育会分科会でパネリストとしてお話をさせていただいたことは、教師としての自分を振り返るだけでなく、教師になるために努力をしていた明治大学の学生の頃の気持ちを

思い出し、非常に良い経験となった。今回、同じ明治大学出身として日々奮闘する教師の方々、教授、教師を目指す学生と関わることが出来て、明治大学という強い絆を感じた。明治大学が私の教師になりたいという夢を実現させてくれた場でもあり、自身の原点だと感じている。今回パネラーとして呼んでいただいた感謝を込め、一年間教師として働き感じたことを以下に記したい。

1 教師としてもっとも大切なこと

それは臨機応変さである。大勢の生徒が日々学校生活を送っている中、様々なことが起こる。時には予想もできないようなことが起き、途方に暮れることもある。そんな時に大切なことは冷静になり、臨機応変に対応していくことであり、その際には一人で抱え込まずに、保護者や周囲の先生方、外部機関と連携することが重要であると感じた。

2 生徒と接する上で心掛けなくてはならないこと

中学生は反抗期の時期である。私自身も中学生の時は反抗し、先生方にはご迷惑をかけていた。働き始めた際はそんな子どもたちに苛立ち、叱ってしまうこともあった。しかし、ある先生に言われたことをきっかけに子どもたちの見方が変わった。ある先生に言われたことは、「すぐに怒鳴ったり叱ったりする先生は余裕のない先生だよ。少し自分の気持ちを抑えて生徒たちを見守ってごらん」ということだった。このことを言われてからよく周囲の先生方を見るとベテランの先生方はこのようなことが徹底されていると感じた。その言葉を受けてからは、なるべく生徒を見守るようにし、自身の仕事の見通しもしっかりと持って余裕をもって生徒と接する様に心掛けている。

3 様々な生徒が存在するということ

自身が私立に通っていたということもあり、公立の学校では様々な発見があった。その中でも特に感じたことは、様々な生徒がいるということである。特別な支援が必要な子、複雑な家庭の事情を抱えている子など多くの生徒がいた。周りの先生方を見ていて、そのような子どもに対し、個別の支援を周囲と連携して丁寧に対応していく事の大切さを感じた。私も同じように丁寧に対応していくとともに、そのような子に日常的に声掛けを行い、どんなことでも相談しやすい教員になりたいと思った。

4 社会科の教師として

私は社会科のベテランの先生方に囲まれ、社会科の知識に長けた初任者指導の先生に日々指導していただくなど、大変恵まれた環境にある。以前に比べて授業は落ち着いて出来るようになってきたが、知識や教養、雑学、話術をもっと身に着けるために勉強していかなければならないと感じる。教師は死ぬまで一生学び続けなければならないものであるといわれるが、その通りだと思った。生徒にとって分かりやすい、社会が好きになったと思ってもらえるような授業を目指して日々努力を重ねていきたいと強く感じた。

5 今後の仕事への取組み

この先、どれだけ年数が経っても明治大学で努力してきたこと、教師になりたかった気持ちを忘れず、一人ひとりの生徒に丁寧に接し、学校生活を安心して有意義なものにする手助けをしていきたい。また、社会科の教師として授業力を高め、日々研鑽を重ねていきたい。

初任者として過ごす 1 年間

山田 敬久（和光市立第三中学校）

1 はじめに

学部4年時に埼玉県教員採用試験に合格しました。採用猶予という制度を利用して大学院に進学し、2017年4月から赴任して現在に至ります。

大学院の2年間は、教職課程のTAとして勤務させていただいたり、教職課程の先生方と交流させていただく機会が増えたりと、教員として働くための準備期間として充実した日々を過ごしました。満を持しての教員生活のスタートでしたが、現実を目の当たりにして、勉強の毎日を過ごしています。

担任、部活動の顧問、初任者研修など抱える業務が多いです。しかし、その分やり甲斐はとても大きく、先輩の教員に支えられながら徐々に自身のスタイルを確立しつつあると感じています。

2 要旨

教職課程を履修している学生を対象としていることから、今後教職に就くことをイメージさせることを意識して資料を作成しました。

「私の生活」では、自身の生活について紹介し、担当業務が多岐にわたっていること、初任者の忙しさを伝えました。教員とは授業をする、部活を担当することだけでなく、様々な仕事に複数の教員で携わることによって生徒を指導していくのだ、ということを知ってもらいました。

「大変さ・喜び」では、上記のようなマイナスイメージばかりではなく、それゆえに得られるやり甲斐について紹介しました。やはり教員のやり甲斐は、目の前の生徒の成長が見られることに尽きると思います。私自身もそのような瞬間を何度も目の当たりにし、その度に今までやってきたことが間違っていなかったのだ、ということに気付かされます。失敗しながらも生徒とともに成長していくという気持ちをいつも忘れないようにして生活をしています。学生のみなさんにも伝わっていると嬉しいです。

3 おわりに

採用試験に合格したときから、本教育会の第7分科会で話すことを一つの目標にしてい

ました。自身の生活を振り返ること、またそれを後輩に伝えることができ、このような機会を与えてくださった伊藤貴昭先生に感謝しています。

講演の最後に学生みなさんに「物事の本質」を見失わないことを伝えました。そして今回の機会を与えていただいたことで、改めて私自身も考えることができました。毎日が大変でやることが多くて、いろいろな生徒がいる中で、なぜこの仕事を選んで働いているのか、ということ思い出すきっかけになりました。

先輩の教員や生徒に支えられながら仕事をしてきて、早いもので1年が過ぎようとしています。生徒や地域にもっと貢献できるように、これからも研鑽を重ねていきたいと思っています。

おわりに

本年度は教職課程常設分科会として3回目の発表であった。パネリストの先生方と参加した学生諸君の間で、昨年度同様、活発な意見交換ができた。これから教師をめざす学生諸君にも大きな刺激となったものと思われる。今回の分科会が、3人の若い先生方にとって、今後の教師生活を学び多いものとするに寄与することを期待したい。

今年度の発表からは、新任間もない教師にとって、今後の長い教師としてのキャリアをどのように形成していくかについての展望を持つことが重要な課題となり得ることが強く感じられた。将来的には、これまで3回のパネリストの方々が10年後、20年後にどのような教師となり、また、教師としてのイメージがどのように変化したかを振り返る機会を持つことも必要であろう。

来年度以降も、継続して若い方々の力と情熱をリレーしていくような分科会を企画し、こうした課題に貢献できるようなものとしていきたいと考えている。

(伊藤 直樹)